第２回　全国都市緑化仙台フェア基本構想懇談会　議事概要

日　　時：令和２（2020）年７月28日（火）15：30～17：30
会　　場：仙台市役所本庁舎８階ホール
出席委員：涌井座長　遠藤副座長　内海委員　古積委員　今野委員
佐藤（修）委員　佐藤（重）委員　佐藤（美）委員　庄子委員
深松委員　本郷委員　舛谷委員　（計12名）
オブザーバー：国土交通省東北地方整備局建政部　柳原都市調整官
欠席委員：工藤委員　渡部委員　（計２名）
事 務 局：建設局長　建設局次長　百年の杜推進部長　百年の杜推進課長
同課全国都市緑化フェア推進担当課長　公園課長　同課公園整備担当課長
河川課長（計８名）
司　　会：全国都市緑化フェア推進担当課長

１．開会

○事務局（全国都市緑化フェア推進担当課長）
－開会－

２．挨拶、事務局紹介

○事務局（建設局局長）
－挨拶－
○事務局（全国都市緑化フェア推進担当課長）
－事務局紹介－

３．委員紹介

○涌井座長
・書面決議で座長をお引き受けいたしました涌井です。
・仙台が「杜の都」と言われるようになったのは、政宗公の時代の植樹がきっかけであることや、戦後、地域の人々が苗木を植えるというところからケヤキ並木が始まったことなど、仙台は他の地域の都市緑化の取り組みとは一味違った伝統の積み重ねがある。
・コロナの問題によってある種の社会的大変容が起きると考えられ、仙台フェアは、歴史の大転換という動きが少しずつ始まっていく中での開催になると思われる。
・仙台緑化フェアがそのようなタイミングであることをふまえ、懇談会では皆様の色々な知見をいただき、これまでにない都市緑化フェアが実現できたらと思う。

○遠藤副座長

・仙台市公園緑地協会専務理事の遠藤です。私は市の OB で、平成元年度に七北田公園で開催された緑化フェアでは設計を担当し、短期間で大変な思いをしたのを記憶している。再び緑化フェアに関わることができ、恵まれていると思っている。

○内海委員

・宮城県造園建設業協会会長の内海です。日本造園組合連合会にも携わっており、歴代の緑化フェアに庭を出展するなど色々な形で緑化フェアに関わってきた。今回は地元の緑化フェアに関わることができるため、嬉しく思っている。

○古積委員

・日本造園建設業協会宮城県支部支部長の古積です。今回の緑化フェアは新世代へと続く百年の杜づくりということで、東日本大震災からの復興による新たなまちを見てもらう機会になり、また追廻地区という歴史的な場所をメイン会場として開催されるということもあるため、開催後も親しまれるような会場になればと思っている。

○今野委員

・ユーメディアの今野です。緑化フェアは本来多くの来場を目指すところだと思うが、コロナ禍の中で新たな形としてどうしたらいいのか考えたい。
・子どもたちにとってどのような仙台であるべきかという視点も含めて考えたいと思っている。

○佐藤（修）委員

・緑のボランティア団体の佐藤です。震災で失われた海岸防災林の再生ということでもやらせていただいている。
・森づくりと人づくりは車の両輪で、このフェアも単に成功するということでなく、次世代の人づくりも大きな柱だと考えている。

○佐藤（重）委員

・宮城県花と緑普及促進協議会幹事の佐藤です。
・私は生産者なので、この懇談会では生産者の立場として役に立てればと思う。

○佐藤（美）委員

・防災士の佐藤美嶺です。防災士として仙台、宮城を中心に、防災、減災の啓発活動をしている。普段は西公園プレーパークの会の運営にも携わっている。
・仙台に「外から訪れたい」、「ここに住んでみたい」、「ここで子育てしてみたい」と思っ

てもらうきっかけになるフェアになれば嬉しい。

○庄子委員

・石巻専修大学の庄子です。まちの魅力を向上させ観光に活用する研究をしている。

・周辺地域から仙台への憧れは強く、また「杜の都・仙台」は、そのストーリーから考えても世界に打って出られるブランド力があると思う。フェアは賑わいをより作り出すまたとない機会になるため、PR に関する提案をしたい。

○深松委員

・広瀬川 1 万人プロジェクト実行委員会副委員長の深松です。年に 2 回、広瀬川で一斉清掃をやっており、約 2000 人が参加する一大イベントとなっている。

・西公園は写生会のメッカであったり、広瀬川には芋煮会文化があったりする。フェアが終わった後、市民が憩える場所にしたいと思っている。

・近くの国際センターでは国際会議もあるので日本庭園があると良い。仙台では青葉城を案内した後、他に案内できる場所がなかなかないため、そのような場所があると良い。

○本郷委員

・仙台観光国際協会専務理事の本郷です。現在、コロナの影響でインバウンドなど遠方からの観光客の移動は難しい状況だが、地域の移動から少しずつ回復をしていこうと、行政と一緒に手立てを考えている。

・地元の人々が地元を知らないと、地元以外の人々を迎えるは難しいので、「仙台とはどういうところだろう」、「杜の都という言葉とは何だろう」ということを地域の子供達も含めて改めて考えてもらう機会をつくることも良いと思う。

○桝谷委員

・宮城県土木部河川課の桝谷です。

・メイン会場のひとつが広瀬川河畔となっている。都市緑化の推進と合わせて、広瀬川が市民に親しまれ、河川環境の保全につながればと思っている。

○柳原調整官（オブザーバー）

・国土交通省東北地方整備局建政部の柳原です。国土交通省では、グリーンインフラという取り組みを推進している。仙台フェアがグリーンインフラの持つ力や可能性を全国に発信する機会になればありがたいと思っている。

○梛野専務理事（仙台フェア共催者）

・都市緑化機構専務理事の梛野です。

・全国都市緑化フェアは昭和 58 年に始まり、都市緑化の意識の高揚、都市緑化に関する知識の普及、地方公共団体及び民間の協力による都市緑化を進めるイベントである。
・国や地方公共団体だけでは緑豊かなまちづくりはできない。市民や民間企業と一緒に進めることが必要だと考えている。
・東日本大震災からの復興や防災、みどりのまちづくりは全国的な関心ごとで、定禅寺通や青葉通のケヤキに対する仙台市民の想いも良く知られている中で、都市緑化フェアが仙台で開催されることは意義深く思う。

○事務局（全国都市緑化フェア推進担当課長）
－欠席委員確認（欠席委員：工藤委員、渡部委員）、配布資料確認－

４．議事

○涌井座長
－事務局へ定足数確認依頼－

○事務局（全国都市緑化フェア推進担当課長）
－定足数を超えている旨報告－

○涌井座長
－会議を公開とすることの確認（委員一同了承）、議事概要作成を内海委員へ依頼（内海委員了承）－

４．（1）全国都市緑化仙台フェア基本構想懇談会　日程について

○事務局
－資料１「全国都市緑化仙台フェア基本構想懇談会　日程」　説明－

○涌井座長
－委員へ質問の有無を確認（質問無し）－

４．（2）全国都市緑化仙台フェア基本構想　骨子（案）について

○事務局
－資料３　「全国都市緑化仙台フェア基本構想　骨子（案）」　説明－

○事務局（全国都市緑化フェア推進担当課長）
－資料２　「第１回　全国都市緑化仙台フェア基本構想懇談会　委員意見一覧　（3）その他の意見」　説明－

【基本構想骨子（案）への意見等】

○遠藤副座長

・杜の都の環境をつくる条例、そして広瀬川の清流を守る条例の制定から約 50 年が経過し、それが現在の『百年の杜づくり』に受け継がれているので、これまでの取り組みを振り返りながら確認していくという作業が必要。

・「百年の杜づくり」において市民協働は大きな一つのテーマであり、今回のフェアにおいては、みどりの活動団体などの市民活動を盛り上げて、充実させるような取り組みをお願いしたい。

○佐藤（重）委員

・骨子案の中に多数出てくるグリーンインフラという言葉についてもう少し詳しい説明をお願いしたい。

○事務局（全国都市緑化フェア推進担当課長）

・グリーンインフラとはグレーインフラとの対比として表現されたもの。

・今までインフラは、主にコンクリートにより整備され、市民の暮らしを守っていたが、昨今の集中豪雨などの異常気象の中では、一部治水が追い付かなくなるという現象も見られている。

・雨水を全て下水に流すのではなく、地面への浸透や木や草地などで滞留させて保水するといったグリーンインフラの効果が着目されているところ。

・また、みどりにはコミュニティ形成の促進や子育て環境の改善などソフト面での効果もあることから、単に緑の総量を増やすということではなく、そうした機能にも注目していこうというのがグリーンインフラの考え方である。

○涌井座長

・国のグリーンインフラ官民連携プラットフォーム会長代理の立場から補足する。

・今までの地球規模の災害は、例えば津波を防ぐための防潮堤や河川の越水を防ぐための堤防など、個別的な構築物や営造物で受け止めることができていたが、最近の気候変動により、計画降雨量を上回る雨が当たり前のように降り、下水だけでは対応しきれないということが起こっている。

・今までのグレーインフラつまり営造物で対応することを緩和戦略と言うのだが、そのグレーインフラを基盤としながらも、それを補完するという形で、自然の力も活かして適応戦略をとっていこうというのが、グリーンインフラの考え方である。

・例えば、江戸時代では貞山掘の開削により発生した土を両側に盛り、その上に松を植えた。これにより、外海に出ずに内陸部で米の輸送を安全に行うことができるようになり、

あわせて津波に対する多重防御にもなった。
・こうした歴史の知恵に学ぶことが重要。自然の力を借りながら、激甚化する災害に対して柔らかな対応が出来る国土構造をとしていくことがグリーンインフラの考え方だ。

○内海委員
・「７．事業計画」の「(1) 出展・展示計画」に関して、山口フェアでは入場料は有料としつつ、目玉となる大花壇などの展示や餅まきなどのイベントもあった。
・仙台フェアは無料という説明だったが、緑化フェアの規模をどの程度とするかによって入場料について判断をしなければならないと思う。
・仙台フェアとしての目玉や度肝を抜くような展示などは考えているのか。

○事務局（全国都市緑化フェア推進担当課長）
・近年の緑化フェアほとんど無料の入場料設定となっているが、山口フェアは有料とし、テーマパーク的な大規模な緑化フェアであったと認識している。
・仙台の緑化フェアにおいても見どころとなる花壇等は必要と考えているが、事業計画の中でライフスタイルやワークスタイルについて記載しているように、その後の生活のあり方への影響やレガシー効果を考えたときに、花壇を外から見るということだけではなく、「仙台フェアで体験したみどりのある暮らしを今後の生活にも取り入れたい」ということにつながることが大事だと思っている。

○内海委員
・目玉については花壇に限らず、日本庭園を設けることも素晴らしいと思うし、外国の要人を迎え入れるためにも大事だと思う。
・花壇や庭園にこだわるわけではないが、仙台の緑化フェアとしての目玉や度肝を抜くような何かがあるよい。

○深松委員
・緑化フェアでつくったものはフェア終了後も常設で残るものなのか知りたい。
・骨子（案）の中に伊達政宗公の名前が一言も出てこない。追廻地区も西公園地区も家臣が住んでいた所ですぐそばには城跡もあるので、その関係性も大事にした方が良い。
・仙台は災害に強いまちである。海岸防災林も復興のかさ上げ道路もある。そしてみどり豊かな住みやすいまちである。これをしっかり発信していけたら良い。

○事務局（全国都市緑化フェア推進担当課長）
・フェア会場は、現在、公園整備で地盤の整地作業をしており、整地終了後に緑化フェア用の会場整備を進めていくが、基本的には花壇や建物、展示物は仮設となり、これらは

フェア終了後に更地に戻して、引き続き公園整備計画に基づいた整備をすることとなる。
・広島の緑化フェアではメイン会場の花壇が非常に好評で、「残してはどうか」という声もあると聞いている。仙台市でも同様の声があがることも想定される。

○事務局（公園整備担当課長）
・青葉山公園ではビジターセンター機能や管理機能を持つ公園センターを今年度から着工することになっている。公園センターでは伊達政宗公や仙台の始まりの場所の紹介などの展示機能のほか、それらを話題とした体験プログラムなどの提供も考えており、これは目玉で常設の公園施設として残るものであり、フェア期間中もメイン会場の一部として活用していくこととなる。

○涌井座長
・横浜の緑化フェアの会場でも、里山地区に大規模な花壇が造られたが、もったいないということで毎年つくりかえながら継続しているといったケースもある。

○本郷委員
・「３．開催の基本方針」の「“訪れたい、暮らしたい、参加したい”を呼び起こすまちの魅力や仕組みづくり」に関してだが、みどりだけでリピーターとして何回も仙台に来てもらうのは難しいと思う。「まちの魅力や仕組みづくり」で思うところあれば聞きたい。

○事務局（全国都市緑化フェア推進担当課長）
・今回はメイン会場に加え連続性のある空間として定禅寺通や青葉通などの街路も活用する予定である。既に仙台市では定禅寺通の緑道や歩道を使った賑わい創出として、パークレットという椅子やテーブル等を出して店の利用者だけではなく通行人もそこに座って憩うことができる取り組みを行っていて、まちの活性化につなげようとしている。
・緑化フェアにおいてもケヤキ並木を活かして、実行委員会だけでなく地元商店街や地権者の協力も得ながら、まちなかで面的に展開したいと思っている。これはみどりだけではなく、事業者と一緒に魅力あるまちづくりをする機会にもなり得るし、そうした仙台人の暮らしを垣間見ることも観光資源のひとつになり得ると考えている。

○佐藤（修）委員
・このフェアを通じて、次の世代を担う子どもたちがどのように育っていくのかというのは大きなテーマだと思う。仙台は学都と言われ、色々な大学、専門学校、高校、中学校、小学校があるが、どのような形でフェアに参加してもらい、一緒に取り組むのか。
・また、仙台市には学校林が結構あるが活用状況は様々なので、フェアを通じて見直しもできるとよいかと思っている。

・小学生の子供たちがどんぐりを拾って、2年ほどかけて苗を育て、それを東部の海岸に植えるという活動もしている。植物を 50 万株調達するとの説明があったが、具体的にどのような植物を考えているのか。

○事務局（全国都市緑化フェア推進担当課長）

・まずは子どもが会場に来たときに、楽しんでもらい、学びに繋がるような子供向けのプログラムなどを用意したい。
・もう一つは、会場整備において、花壇づくりや花植えなどに子どもたちに参加してもらうことや、東部の海岸で行われている植樹などにも参加してもらうことを考えている。
・植物調達計画については現在、手法を検討している段階で、種類やその数量については今後の検討であるが、できるだけ地元から調達できるよう検討したい。

○涌井座長

・「3．開催の基本方針」の「3．次世代の担い手を育てるフェア」に関し、一つ目にある「人材の育成」は少し目線が高い。皆でこの仙台を育てていこうという仕組みをどうつくるかが大事なので、平易な言葉で参加意欲を持つような表現に変えるのが良い。
・多くの都市において機能集約型都市構造へ向けた取り組みを進めているが、その場合の一番大きな都市計画上の課題は周縁部の生産緑地をどうするのか、スポンジ現象を起こさないようにどうするのかということ。都市農地の重要性という観点についてもどこかで訴えかけたほうがいいと思う。
・これからの食料供給において農的ライフスタイルは重要であるし、ウィズコロナの時代において、リモートワークができるなら農地と一緒に暮らしたいという、今後そうした新しいライフスタイルも出てくると思う。

○建設局長

・仙台市は、全国的にかなり早い段階からコンパクトシティを標榜しており、仙台市では生産緑地の指定はないが、都市の近郊の農地は市街化調整区域として重要なグリーンインフラとなっている。
・この農地が十分に機能するよう、経済部局など一緒に維持活用に取り組んでいきたい。

○涌井座長

・グリーンインフラをテーマにすると、都市農地は例えば受水面積の観点から非常に大きな要素があるなど様々な機能が浮き彫りになってくると思われるため、できるだけ視野の中に入れていくのが望ましい。

○涌井座長

・未来のライフスタイルとも関係してくると思われるが、「仙台でなければできない」や「仙台らしさ」ということについても意見をいただきたい。
・一方、国は「ウォーカブルなまちづくり」という様々な人々の暮らしを街の中へ展開していこうとする取り組みを進めている。道路法改正による規制緩和により、街路にお店を出すことも可能となった。
・これを可視化できる場所はまだ日本にあまりないが、仙台にはブールバール、街路樹が立派に整備されており、こうした潮流の中で仙台らしさを打ち出すことができるのではないかと思う。

○庄子委員
・「杜の都・仙台」の魅力はまちの中にみどりが溶け込んでいるということと、都市から豊かな自然環境へのアクセスの良さ。街中から 20～30 分でアクセス可能で、しかも有名な温泉や山の大自然があるので、PR していきたいと非常に強く思う。「３．開催の基本方針」に「豊かな自然へのアクセスの良さ」というような文言を入れることや、「近くにある市民のおすすめのスポット」のような形でメイン会場からの回遊性を促すようなことができないか。
・「杜の都・仙台」は緑を「守ってきたところ」と言われるが、これらの視点で伊達政宗公からの歴史や屋敷林なども含めて整理し PR していくことができるのではないか。

○佐藤（美）委員
・仙台の魅力は街中のみどりの豊かさ。様々な都市に住んできたが、街中の外でコーヒーが気持ちいいと思った街は仙台が初めてだった。「緑の回廊」を上手に活用し、移動の間を気持ちよく過ごせたり、特別な時間になったりする仕掛けがあってもよい。
・市民が主体的に関わることができる仕組みが大事。
・コロナウイルスが問題になってから子どもの外遊びがすごく注目されている。自然と関わる機会や環境教育となるとプログラムを考えがちだが、仙台には豊かな自然が残っている場所が多く、あまり整え過ぎずに子供たちが自由に遊べるスペースもあれば良い。
・「３．開催の基本方針」の「２．杜の都の“みどり”を体感するフェア」で広瀬川が出ているが、できれば川辺まで下りて川に親しむようなことができれば良い。
・河川環境のなかでも防災も忘れてはいけない部分。防災のことを学びつつ、川のすごさ、きれいさ、楽しさというものも感じられる仕組みが考えられたら良い。

○古積委員
・メイン会場はきれいに整備すると思うが、それに隣接する青葉山や博物館などとの間で調和があるのが望ましい。ギャップがあると来場者に残念な思いをさせることにもなりかねない。博物館にある残月亭という茶室があるが、現在あまり利用されていないよう

だが、移設したり、再整備をしたりできないのか。西公園の北側についてもある程度整備しないと南側との連続性がとれない。緑の回廊という視点からも西公園から定禅寺通への繋がりを持てるようにしてほしい。

○今野委員

・3 年後の緑化フェアの開催時においてもコロナと共存している状況を想定する必要がある。イベントではオンライン発信の併用も考えておく必要もある。例えば「杜の都」を実感できるような場所のムービーを発信したり、当日のイベントをオンライン発信したりすることが考えられる。

・移住定住の観点で、仙台や東北はチャンス。緑の中のサテライトオフィスやワーケーションなど、仙台では気持ちのいいところで働けることを見せる提案ができると、企業側からしても面白い。

○涌井座長

・これまでの議論を私なりにまとめると、「未来のライフスタイルをどう表現するのか」、「仙台はグリーンインフラの基盤がしっかりできているので、この骨格的な構造を活かしてどう新しいライフスタイルの提案ができるのか」、「花とみどりがそばにあることがいかに豊かな暮らしをもたらすか」という提案が非常に重要だという話があった。

・それと、なぜ仙台がそうなっているのかというのはこれまで積層してきた歴史があったからで、それをふまえた上に「花」が咲いているという一連のシームレスなストーリーを明確にする必要があり、仙台市民が誇りを持てる大きな要素があると思う。

・個人的には仙台は既に 400 年の過去があるので「百年の杜から千年の杜へ」というくらいのメッセージがあってもいいのではないか。その意味で、仙台に積層してきた歴史的価値をどう表現していくのかということも非常に重要。

・今までの都市緑化フェアはと違い、仙台フェアでは街中に会場を広げようとしているが、それだけでなくゲリラ的展示キャラバン方式でやることも考えられる。

・ポストコロナのことを考えると、人々が意外と近隣に魅力があると気付き始めている。それが結果として地域のコミュニティのインフラなどの共同作業も一緒にやっていくような機運をつくること、つまりグリーンコミュニティという話に繋がると非常に良い。

○事務局（全国都市緑化フェア推進担当課長）

・オブザーバーの柳原原調整官からも一言お願いしたい。

○柳原調整官

・仙台のみどりを牽引する立場の方々にグリーンインフラという言葉とその意味を知ってもらえたことがフェアの一歩になるのではないか。

・杜の都のきっかけは伊達政宗公による屋敷林への植樹の奨励、つまり民地の緑であった。それが戦災で失われて、行政が戦災復興で公園や街路樹などみどりの骨格を作ったということで、かつては民、戦後は行政が一生懸命やってみどりが豊かなまちになったということに感銘を受けた。
・そして今度は官民が一緒になって協働で行い、今回のフェアをきっかけに新しい仙台の百年と言わず千年の杜づくりにつながる大きな流れになったら素晴らしいと思う。

５．閉会

○事務局（全国都市緑化フェア推進担当課長）

－閉会－